

平成21年4月17日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18730338
 研究課題名（和文） 現代日本における「戦争の記憶」の社会学的研究：歴史意識の継承と断絶をめぐって
 研究課題名（英文） A sociological Study of “Memories of war” in contemporary Japan

研究代表者
 野上 元（NOGAMI GEN）
 筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授
 研究者番号：50350187

研究成果の概要：

本研究は、現代日本における「戦争の記憶」の継承と断絶を課題とする調査研究であり、特に二つの柱を持っている。一つは、長野県下水内郡栄村における戦争体験の（継続）調査である。体験者の高齢化もあり、すでに聞き取りは困難だが、むしろその困難なプロセス自体が今しかできない本研究の意義となる。もう一つは、歴史博物館や平和記念館などによって展示・保存される「戦争の記憶」についての調査研究である。本研究における特徴を述べるとすれば、それを特に「地域」という枠組みにおいて考察する点にある。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	180,000	2,380,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：戦争の記憶、戦争体験、戦争と地域社会、歴史意識、歴史博物館、歴史的景観、「坂の上の雲」まちづくり、戦没者記念碑

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年の社会学や文化研究の分野において「戦争の記憶」論が盛んになってきている。「文化の政治学」的な志向とも関連して、例えばナショナリズム批判（「想像の共同体」としての国民国家への批判）と結びつくことなどもあった。様々な種類の大衆文化に表象された「戦争の記憶」についての分析も盛ん

になされている。

ただその一方で、それらを体験者への聞き取りに基づく具体的な戦争体験研究に接続してゆく試みが極めて乏しいという現状があった。体験者たちが高齢化し、貴重な証言を聞くことのできる可能性が日々狭まっているにもかかわらず、そうした試みは量的にも質的にも不足している。

研究代表者によって 1996 年より長野県下水内郡栄村で行われてきた聞き取り調査は、そうした戦争体験の喪失をめぐる、いわば「定点観測」ともなっており、戦争体験者が社会から失われてゆき、聞き取り調査が困難になっているということ自体が「方法」そして「目的」として理解されている。

(2) 歴史博物館・平和祈念館など、「戦争の記憶」を展示・保存する空間についての社会学的な研究は、近年とくに盛んになってきているようにみえる。集合的記憶論、そして「戦争の記憶」論や文化遺産（負の文化遺産）研究などと関連して、社会学と歴史学、文化資源学、美術館学、建築史、考古学、メディア論などが交錯する、横断的な研究領域であるといえる。

ただし歴史博物館や平和記念館などにおける表象や展示についての分析を、どのような社会性において行うのかについては、あまり深く考えられていないようにみえる。いわば実証的な作業と理論的な考察のための方法論的な知見を結びつける枠組みの探究である。

展示の分析や表象分析を成り立たせている考察の場に孕まれている「奥行き」を考えると重要である。博物館や記念館は、少なくともマスメディアではないのだから、それらの分析を現代社会論や社会学的な分析に接続するためには、実証的な作業とともに、何らかの方法論的な工夫が必要となってくるはずであろう。

2. 研究の目的

(1) 調査地である山村は、高齢化も進み、主に対面的なコミュニケーションによって地域共同体が結ばれていることもあって、日常的に戦争体験者にふれる機会に比較的恵まれている。

文学やジャーナリズム、大衆文化などのマスメディアに媒介された「戦争の記憶」は、大量に表象を残すので、極端な話、その分析は後世においてもできる。「戦争体験」に関してまさに「今」しかできないことを探せば、失われつつある戦争体験について、その失われ方のありようも含めて観察してゆくこと

であろう。本研究では、それを特に「村」といういわば「定点観測」において行うことを目的として、継続的な聞き取り調査を行ってきた。

(2) 歴史博物館・平和記念館などは、文章や「語り」によってではなく、視覚的表現や様々な工夫においてそれらを組み合わせて「戦争の記憶」を伝えるメディアであり、その総合性において、格好の社会学的考察の素材を提供しているといえる。

ただ繰り返すように、それらはマスメディアによって媒介されるものではなく、限定された数の来館者（の身体）に直接投げかけるようなものである。それをどのように社会学の対象として分析するのか？ この課題に対して、関係者へのインタビューや資料調査を進めつつ、理論的・方法論的な知見を固めてゆくことが、当面の目的である。段階としては、研究の萌芽期にあるといえる

3. 研究の方法

(1) 先に述べた「定点観測」の意義について考察するために、「方法としての地域」を導入し、考察・分析のよりどころとしてきた。本研究の方法における独創的な点である。

長野県下水内郡栄村における「戦争体験」調査は 10 年以上続く継続的な聞き取り調査である。多様な人間関係をたどって、数多くの人々に体験を聞いてきた。ただ近年では、たんに戦争体験の聞き取り調査を行うだけでなく、村内の戦没者遺族会、軍恩連盟、戦没者慰霊碑やお墓、近隣村での体験記編集への取材など、同村を拠点としながら、戦争体験や戦争の記憶をめぐる様々なテーマに調査対象を広げてきている。

当然ことながら、「戦争体験」は、村の様々な人間関係に埋め込まれているのであり、聞き取り調査に関連するそのような調査は、それ自体の価値もあるが、さらに一方で、時間の流れのなかで戦争体験がどのように維持され、失われつつあるのかということ、当人の「語り」とは違う水準で明らかにしてくれるので、両者はむしろ関連しあうものであるといえる。

(2) 平和記念館や歴史博物館における「戦争の記憶」の展示や保存についての調査研究では、ただ見学し資料集めをするのではなく、関係者への積極的なインタビュー調査を行っている。インタビューを通じて、設置に関わる内部資料や地域社会における様々な問題などについての知見をえることも多い。

博物館や記念館には、様々な主体がいろいろな思いを込めて関わっており、それらの重なり合いとして産出される「歴史」や「記憶」が、「地域社会」（例えば「まちづくり」）という視点で考えたときにどのように機能しているかを探ることができるのではないかと考えている。

4. 研究成果

(1) 今回の補助金を得ることによって、戦争体験の聞き取り調査を継続することができた。戦争体験者の記憶は日々薄れているし、次回訪問時には会おうと思っていた方が亡くなっていたことなども数多くあった。存命であっても、健康上の理由によって、家族が会わせてくれないということも少なくなかった。

けれども、調査者のそうした経験の一つ一つが、時間の流れのなかで変化してゆく集合的記憶の変容と対応しているのではないかと考えている。「戦後」という枠組みにおける「戦争体験」の歴史を、内容分析的ではなく、言説の社会的位置づけにおいて理解する試みについては、野上(2007)「戦後社会と二つの戦争体験」で論じた。

この論文は、「戦争の記憶」研究や「戦争体験」研究において引用されることも多く、自分自身の研究枠組みにとって重要な成果となった。「戦争体験」言説の歴史を考えたとき、「兵士の戦争体験」と「市民の戦争体験」の二つの系譜があり、両者はときに手を携え、ときに対立しあってきた。それは、「村」で聞き取り調査をしてきたという、その調査の条件自体を対象化し、分析することによってえられた成果であった。

また、上記であげた戦没者慰霊碑やお墓に関する調査は、まだ着手したばかりだが、戦死者の人間関係や社会的な位置をめぐる象徴・メディアであるとも考えられ、本格的な

調査に向けての足がかりをえることができた。それらの持つ意味については、野上(2008)「地域社会と『戦争の記憶』—『戦争体験記』と『オーラル・ヒストリー』」にまとめることができた。

また、本研究の社会的な意義を考えると、重要なのは、学術的成果の一般社会への還元である。自費出版を主とする出版社の NPO 団体「自費出版ネットワーク」に対する講演である野上(2006)「戦争体験記の意義」や、問題意識の高い若者たちの勉強会である「地球市民アカデミア」における講演である野上(2007)「現代社会をどう捉えるか〜過去との対話を通して」といった場合は、自らの研究の価値を再確認するとともに、そうした場における対話のなかからまた新しい研究アイデア（例えば、「昭和ブーム」をめぐる実感とその流行の理由について）を得ることのできる、貴重な体験であった。

また、同時代史学会での報告である野上(2008)「体験／メディア／同時代史——社会学から見た『戦争体験』と『戦争報道』をめぐる」は、歴史学者との交流の場となった。社会学者と歴史学者の交流は、近年ますます重要性を高めているはずである。とりわけ、社会学における歴史的研究が、歴史学からどのようにみえているかを知る、良い経験となった。

(2) 広島県呉市海事歴史科学館を始め、様々な歴史博物館・平和記念館を訪問調査した。先にも挙げた野上(2008)「地域社会と『戦争の記憶』—『戦争体験記』と『オーラル・ヒストリー』」に、その成果の一部が活かされている。そうした訪問調査のなかでも特に、「戦争の記憶と地域社会」というテーマに関連して、文化遺産や歴史的環境の問題とまちづくりを融合させた愛媛県松山市の試みである「坂の上の雲まちづくり」にアプローチすることができたのは非常に大きな収穫となった。

市役所の関係者（坂の上の雲まちづくりチーム）、坂の上の雲ミュージアムの学芸員、NPO 関係者などの各関係者へのインタビューのほか、そのコンセプトの形成と実行をめぐる重要な資料をえることができた。

関連資料も膨大にあり、研究補助期間中に論文としての成果を発表できなかったが、追

加インタビューも加え、次年度以降に成果としてまとめることにしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 野上 元、「戦争とメディア(1)——メディア論講義ノートから」、『社会学ジャーナル』(筑波大学社会学研究室)、33号、p93-106、2009年、査読無

② 野上 元、「地域社会と『戦争の記憶』—『戦争体験記』と『オーラル・ヒストリー』」、『フォーラム現代社会学』(関西社会学会)、第7号(「特集 オーラル・ヒストリーと歴史」)、p62-71、2008年、査読無

[学会発表] (計3件)

① 野上 元、「体験／メディア／同時代史——社会学から見た『戦争体験』と『戦争報道』をめぐって」、同時代史学会第18回研究会「社会学と歴史学の接点をさぐる—『戦争体験』の問題を中心に」、2008年3月15日、立教大学

② 野上 元、「地域社会と戦争の記憶」、関西社会学会第58回大会シンポジウム「オーラル・ヒストリーと歴史」、2007年5月27日、同志社大学

③ 野上 元、「『戦争体験』とは何か?～風化する「戦場の記憶」をめぐって」、シンポジウム「戦争体験と戦後日本社会」(慶応大学COEプログラム「多文化世界における市民意識の動態」) 2006年11月26日、慶應義塾大学

[図書] (計1件)

① 浜日出夫編『戦後日本における市民意識の形成—戦争体験の世代間継承』慶應大学出版会、2007年、野上 元「戦後社会と二つの戦争体験」(第一章) p1-21

[その他]

① (講演) 野上 元、「現代社会をどう捉えるか～過去との対話を通して」、NPO法人「地球市民アカデミア」第14期、於お茶の水、2007年6月7日

② (新聞記事)「『過去』が『歴史』へ変わるプロセス」『朝日新聞(夕刊)』2006年12月7日(「テークオフ」欄)

③ (講演) 野上 元、「戦争体験記の意義」、NPO法人「自費出版ネットワーク」公開講座、於小伝馬町、2006年5月13日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野上 元 (NOGAMI GEN)

筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：50350187